

山と博物館

第24巻 第9号

1979年9月25日

大町山岳博物館



槍ヶ岳

撮影 平瀬貴志

大町の宿

「大町にもいろんな宿があつて、入山というのが大町で一番だった。」と勝山が言葉を継いだ。「しかし、山の人はどんなにえれえ人でもみんな対山館せえ。百瀬慎太郎さんは、こまけえところに気のつく人だな。宿の人の礼儀正しいこっちゃあ、入山だつてとてもかなわなかつた。」

「何せ商売ぬきでな。」と平林がいった。瓜生卓造氏の「おおまち物語」の一節である。

勝山とは九日町の勝山佐久衛氏であり、また平林とは大黒町の平林高吉氏である。二人とも山の案内人として登山者の間ではよく知られていた。

この二人が語っているように大町には多くの旅館があつた。駅に近い方から八日町の対山館、下仲町の太田屋、銭屋、松葉屋、カクイチ旅館、九日町の入山旅館など、みんな格式もあり有名だった。特に入山、対山館は門がまえも立派であり、入山はピリヤードのある旅館として、宿泊の外国人が興じている姿が街路から見えた。対山館は百瀬慎太郎氏の経営で岳人にはなじみの宿。

しかし、いまでは入山は、白い建物の銀行に、カクイチ旅館はやめて大町をはなれ、対山館は戦争中の軍需工場の寮からおもてからは往時を偲ぶことも出来ない医院に改装、また銭屋、太田屋は旅館を止めて商賣替えをってしまった。山の町にも時代とともに、新しく旅館やホテルが出来たが、これらのなじみ深い宿が次々に姿を消して、ただ二軒松葉屋旅館だけが残っているのは、古い岳人にとってさみしい限りである。

横川 通（浦和市東高砂町）

昆虫館と啓蒙活動

矢島 稔

昆虫・この小さな魅力に満ちた生きものを正しく紹介する努力は明治以来多くの人によって手がけられてきました。

明治二十九年、岐阜の名和靖によって開かれた名和昆虫博物館は特筆すべき存在で今尚その影響は各地の博物館に残っていると思われま。

所狭しと並べられた標本、目をうばう美しく珍しい昆虫の数々、それがどれ程子供たちに刺戟を与え、興味をおこさせたかは計り知れないものがあります。

名和昆虫館が果たした役割はこうした展示による啓蒙ばかりではありません。月刊誌「昆虫世界」を始め、日本鱗翅類論など多数の出版物を通して生活の中の昆虫に関心をもたせる効果があったと思います。

大判の名和昆虫図説・第一巻の序文に「凡ソ文を案シテ其物ヲ判ズルハ、図ヲ見テ其実ヲ知ルノ便ナルニ加カズ。図ヲ以テ其変化ヲ示スハ、文ヲ以テ之ヲ記スルノ簡ナルニ加カズ。……」とあり、立派なスズメガの石版による図は今日でも遜色のないすばらしいものです。

先年他界された岡崎常太郎先生から伺ったのですが、夏休みに主として教師を対象に開かれた昆虫の講習会は名和さんを始めとする所員が実物を使って興味深く話され、実り多いものだったという事です。「バラの一株、昆虫世界」というキャッチフレーズは現在にも通用する自然のしくみを示して余りありません。

明治四十年、東京の浅草に昆虫館をつくり生きた昆虫の展示を試みたという話は余り知られていませんが、これこそ先駆的な啓蒙活動

動で当時としてはロンドン動物園の中にあつた「インセクト・ハウス」以外には無かつたものでしょう。

しかし一般の関心は低く、間もなく閉館し昆虫は再び標本による展示が中心になつていくのです。

啓蒙にかけた名和靖の情熱はなみなみならぬものがあります。その影響をうけて多くの昆虫学者が育ち、アマチュアの数がふえたことは疑いのないところでしょう。

昭和になつて各地に昆虫館が生まれてきました。宝塚昆虫館もその代表的な一つです。

これも標本中心の展示館であり、月一回の採集会を開き、「宝塚昆虫館報」という定期刊行物を出し、今では各分野の第一人者になつている人たちの若き日の報文が随所にみられます。

終戦を境に社会は大きく変わり、特に教育界での自然のとり上げ方は生態学の抬頭と相まつて著しく変化したと申せましょう。

昭和二十九年十月、宝塚昆虫館に一つの温室ができ、これに「野外飼育場・インセクタリウム」という看板がかかけられました。

これは当時の責任者であつた福貴正三氏の発案になるもので画期的な展示でした。

それ迄も昆虫館には飼育箱や水槽を使って生きた昆虫を観せていた事はありました。

それは「生きてゐる」という事は標本とは違つていましたが、種類を紹介する個体展示にすぎなかつたのです。

しかし、この野外飼育場は食草を植え、花や給密装置を設けて蝶が自由に飛び交い、産卵できる施設だつたのです。

単に種類を展示するだけでなく、生活条件

を与え環境もいっしょに見せたという点でこれは新しい方向を示したものでした。

私もこれを見に行き、福貴さんの話を伺いました。しかし残念なことにこれは数年後とつりこわされ宝塚昆虫館は閉ざされてしまつたのです。

昭和三十三年の春、私は大学の指導教授であつた古川晴男先生から昆虫館を造り、その推進力になつて欲しいといわれました。

これは考えてもいなかった事で、何をどうしたらいいのか見当もつかなかつたのです。

しかしロンドン動物園にあるインセクト・ハウスの写真が二枚手に入り、これを参考に始めから生きた昆虫を展示するための昆虫館を豊島園(東京の遊園地)に造りました。

その構造は丁度水族館と同じで、水槽の代りにテラリウム(陸槽)を並べ、種類ごとにその生活環境をつくり、幼虫や成虫を常時展示する形だつたのです。

この時から私は啓蒙の困難さとぶつかり合い、試行錯誤の毎日ではじまつたのです。

例えば約一立方メートルのケースに蝶を展示した場合、食草を植え、吸密できる花を入れても



展示の一例 カブトムシのさなぎ

蝶は中で飛びませんし蜜を吸うこともしませんが、明るい方に集まりただばたいたしているだけです。風に向つて飛ぶことが考えられるので上から微風を送つたりしましたが、いたづらに土がかわき草を枯らすだけでした。

これはトンボでも同じ事で、二、三日すると翅がぼろぼろになつて、とても展示できる状態ではなくなりま。

その点甲虫類は比較的展示しやすいグループです。オサムシやマイマイカブリ、それにシデムシのように地上を歩きまわる種類は餌を手前に置けば、どれかがそれを食べるに現われます。しかし暗い所に日中かくれる習性を変へることはできないので、木の根や石を使つて、彼らが安心して休んでいられる場所を予め作つておく必要があります。

こうした場合、こちらが用意した場所以外に表面的には地面で、所々草が生えているように作つてあつても、下は石でつめ、虫が掘れないようにしてないと思われぬ所にもぐり込まれて見えなくなりま。

それに一つのケージにした場合、観る人に不快感を与えない事、むしろまとまつた修景として美しいと思えるようにする必要もありません。これは決して箱庭を造ることではなく、その種類の生活環境を見やすつくるわけですが、そのアレンジに工夫が要るのです。

小さい上にかくれやすい昆虫の展示は動物の中で最も難しいものだと思います。

ところで飼育している内に思わぬ発見もあります。例えばオサムシやマイマイカブリは肉食性だと思われていますが、リングゴを大変よく食べます。これは野外での観察が充分でないことを示しているのかも知れません。

リングゴを与えるのと長生きし展示には都合です。ところが産卵数が著しく減少するので、糖分やミネラルを多くすると何故こういう結果になるのか判りませんが、これは確かなことです。

ケラを飼育した事がありました。ケラは雑



「蝶の温室」で蝶を観察する子供たち

それを大規模にし、蝶の飛び交う中に人を立たせ、目直かに観察してもらおうという発想でした。これが実現したのは昭和四十一年ですから、既に十三年になります。

蝶の飛翔はまず明るさによって可能になり次に気温と風によるという事ができます。同じアゲハチョウ科でもギフチョウやウスバシロチョウは特に風の条件で飛び交う室内で野外のような行動が期待できない事がわかりました。タテハチョウ科の大部分も展示するのが難しいのです。これは彼らのすばやい飛び方が狭い空間では不可能だという事によるもので

餌はイネ科ですが、調べてみるとその中に嗜好性がある、ススキ、イネ、アズマネザサ、オヒシバ、コムギなどはよいのですがメヒシバ、エノコログサ、ハダカムギ、オオムギなどは好まないのです。半生をかけた昆虫の啓蒙活動にはこうした飼育や展示技術の開発と共にそれを正しく紹介する文章やスピーチで人に語りかける積極性がなくてはなりません。それによってどの位効果が上ったか知る術もありませんが、社会に開いた「窓」として力盡きるまで努めたいと思っています。それが動物園や博物館の使命だと考えるからです。

(東京都恩賜上野動物園水族館館長)

食性で動物蛋白もとるが、草の根などを食べると本などには紹介してあります。しかし飼う場合にいつも適当な草の根を与えることはそう簡単ではありません。いろいろ試してみたら結果、米ぬかを固めにねったものを与えるると上手に飼えることがわかったのです。カマキリを展示する事は彼らが肉食性なので餌さえそろえれば容易なように思えます。しかしオオカマキリの一つの卵鞘からは約二百匹の幼虫がかえります。これを全部育てるのは不可能なので、どうせいつしよにしておけば残酷なことですが共喰いして何匹かが大きくなるだろうと思いました。

やして与えるようにしました。ハエを培養した容器にサランネットをかぶせ、その上に飼育箱を置くのです。こうすると羽化したハエが網を越えて上に舞い上ったところをカマキリが捕食するので手間がかからないのです。なお捕食性の昆虫は与える餌の種類を時々変えないと食欲がおちますし、それに水滴をつくって水をいつでも飲めるようにしておくことがコツなのです。少し元気がなくなったカマキリに餌を与える方法は、餌にする虫を傷つけ、その体液を口にぬってやると食べることなども苦肉の策として見つけたものです。

短期間の展示ならいろいろな方法もあるでしょうが、一年中、たとえ外は雪が降っていても温室の中には花が咲き乱れ、蝶が飛び交っていないのではならないのです。それは不自然だと批判する人もいました。しかし出来た場所は動物園なのです。ゾウやキリンはいつでも見られるではないかという人の声にこたえなければなりません。ですから大量の幼虫を育て、順次羽化させる必要に迫られたのです。十匹や二十匹以上の幼虫なら経験がありました。千匹以上を育て、交尾産卵させて累代飼育をつづけるのはそれ程容易なことではありません。結果的には日長効果による非休眠卵の生産など技術の開発に役立ち、それが周年展示につながったのです。

オオムラサキもキベリタテハも止ったまま動かないのです。わづかにコムシジヤイチモンジチョウが可能な種類だという事がわかりました。アサギマダラなどのマダラチョウ科はすばらしく展示に適しており、配偶行動についても細かく観察できました。トノサマバタを大量に飼い、累代飼育して展示する事は昆虫園発足と同時に始めましたから、既に十八年になります。これも今ではごく当たり前飼育してありますが、始めは一年中孵化させる事が可能なか餌は何がいいか等わからない事ばかりでした。自然では六月上旬に孵化し年一化で、卵で越冬します。

私は今でもそう思っています。おぼろげな個体を大きな容器で飼育すると幼虫は六令になり、六回目の脱皮で羽化します。

ところが個体密度をたかめ、群生相に転移すると幼虫は五令までで五回目の脱皮で羽化します。次に卵に休眠期があるかどうかの問題ですが、関東地方のトノサマバタには存在しない事がわかりました。従って卵を恒温器に入れば一定期間の後に孵化し順次幼虫を得ることができました。

昭和三十六年の春、私は当時多摩動物公園の園長であった林寿郎さんに乞われ、新しい昆虫園づくりをすることになりました。

一生に二つの昆虫館をつくることは考え様によつては幸なことです。翌年つくったマスタープランで、それ迄出来なかつた展示施設を加えました。

それが「蝶の温室」「バッタの温室」それに「ホタル飼育場」です。ケースに入れたのでは実態とかけ離れた展示しかできない蝶を、温室の中で飛ばしその中に人を入れるという方法で、私はこれを「開放式展示法」と名付けました。

その原型は宝塚昆虫館の野外飼育場だったのですが、それは外から見せる小温室です。

昭和三十六年の春、私は当時多摩動物公園の園長であった林寿郎さんに乞われ、新しい昆虫園づくりをすることになりました。

コマクサ哀惜譜(2)

三井 嘉雄

その翌年、辻本満丸が常念岳に登ったとき
には、ここではコマクサが健在で頂上直下の
御影石の原に、「コマクサが花壇でも見るよ
うに咲きみだれ、(中略)ここで私のビッケ
ルは猟師君がコマクサを掘る癖の役目をする
ことになった。」(「飛騨山脈の初旅」とい
う。このときの案内人は永田小十郎であつ
た。

さらに、辻本満丸の記録によると、明治四
十三年に針ノ木峠から蓮華岳に登ったとき、
それより一日前に蓮華岳に登ったコマクサ採
り達が頂上のあたりでさかんに死刑執行中
で、「此附近の山中に余命を保てる可憐の珍草も
蔭千匁二匁の仕事の為に哀れ絶滅せらるる
こと近き将来にあるならん。」(後立山連峰
縦走記)として、彼は蓮華岳登山で唯一の
不満足であると嘆いている。

文章にしなかつた人達を考えると、かなり
の数の登山者がコマクサ採りを目撃したもの
であろう。以上の山岳では、その後の紀行に
コマクサの文字の出るものは一つもない。

しかし、木曾の商人はそれより十年以上も
前に、すでに白馬岳にまで足を伸ばしていた
のだった。河野齡蔵は明治三十一年に白馬岳
に登っている。白馬岳の登山者としては、一
二を競うほど早い時期であつた。「白馬岳に
登る記」に記されたところによると、白馬岳
の頂上で、「此あたりコマクサ、エイランタ
イ、トウヤクリンダウ等多かり御岳にて商ふ
オコマグサと称ふるものは多く此地より採れ
るものなりしと云ふ。」としている。白馬岳
登頂は八月十五日のこと、このときの山行
で白馬岳が植物の宝庫であり、本州ではじめ
てウルップソウやチシマリンドウが見つかつ

て注目される紀行となつた。これは翌年の「
信濃教育」第一五三号に掲載されたものから
の引用だが、同題でほとんど同じ文章が、明
治三十三年七月発行の「植物学雑誌」第一六
一号にも掲げた。こちらは全国誌なので影響
が大きく、結果的には山岳会(のちに日本山
岳会)を結成する引き金になつた文献といつ
ても過言ではない。

というのは、この論文に刺激されて多くの
植物学者が白馬岳をめざすことになり、登山
の風潮を盛り上げることになつた。それらの
登山者の多くが日本博物学会のメンバー
であり、山岳会ははじめ日本博物学会の
若手会員が母体となつたこと、そこへウエス
トンから啓発を受けた小島鳥水などが発会を
呼びかけたことなどに起因するからである。
機が熟していたともいえる。

それにしても、当時の登山が地形、鉱物、
植物、昆虫など自然界の探求を目的としてい
たことに、今の私達は学ぶところが多いと思
う。

「明治の山旅」の中で武田久吉が記述した
ところでは、「さて本当は代馬ヶ岳である白
馬山へ東京から行った最初の人は理学博士矢
部吉植氏で、明治三十三年(一九〇〇)七月
発行の「植物学雑誌」第十四巻第百六十一号
にこの山の記事が載るや、同年八月に、信越
線によつて長野に達し、ここから十余里の路
を山麓の四ツ屋まで歩いたのであつた。」
そして、矢部の二回目の白馬岳登山は明治
三十五年八月で、このときは明科から大町に
向かつている。鉄道が長野から通じたのであ
つた。長野県からは信濃博物学会の保科五無
齋が、矢部に同行した。保科はこのころ県内

の鉱物採集に凝っていたが、渡辺敏が校長を
していた長野高等女学校に採集した岩石を運
賃先払いで送りつけ、受取人を渡上かららせ
ていた。「体操場の隅にはじめ積み上げた岩
石は、やがてだんだん領分をひろげ、とうと
う体操場は使えなくなつてしまつた。」(「
信州教育の墓碑」という傑物であつた。し
かし、これは往時の教育者の熱気を充分に感
じさせてくれる。

また、武田久吉は幕末から日本に駐在した
イギリス領事アーネスト・サトウの実子であ
り、牧野富太郎の薫陶を受けた植物学者でも
ある。その武田が白馬岳に来たのは明治三十
八年のこと、コマクサの花を訪ねたり、楽
しい散歩を試みたと述べている。
學術登山で白馬岳に登つた人は、このあた
りから明治末までが最高で、収穫も大きかつ
たようである。

明治三十五年、伊藤慎三ハゴロモソウの発
見、山崎直方水河療養の岩石を発見、三十六
年、折井最一植牧採集の登山、大雪渓を白馬
の大川渡しと記録、矢沢米三郎クモマキンボ
ウゲの発見、日光植物園主五百城文哉の登山
三十七年、河野齡蔵、信濃博物学会の志村鳥
嶺の登山、とめざましい記録を残した。

明治三十一年に河野齡蔵を白馬岳に案内し
た人夫は、白馬岳のコマクサ採りであつたと
いうことで、そのころコマクサ採りの日取が
二十五銭になるので、河野たちの案内料も二
十五銭であつたと、のちに記している。大正
二年に新潟県博物館調査会の一行三十四人が蓮
華温泉に来たときにも、コマクサ採り二人が
同宿したといつている。

このように御岳のコマクサ採りたちは、御
岳のコマクサを絶滅させただけでなく、コマ
クサを求めて次第に遠くの高山にまで登るよ
うになり、明治末には、燕岳を平らげてつい
に白馬岳にまで来ていたのだつた。
話は変わるが、明治三十八年の八月は雨天
続きで、山は大荒れとなつた。しかし、その

雨の中を白馬岳に登山した人と、地元の人達
との間にトラブルがあつた。連日の雨は、岳
に人が登つたからで、神の怒りにより山が暴
れた。この分では稲は稔らず飢饉になる恐れ
がある。案内人は全員下山せよ、ということ
になつた。このときの登山者の中には、この
山岳会の中核となる人々がいたが、その中
の一人が村長に手紙をして、一応の解決をし
たのであつた。

そして、できたばかりの山岳会は事態を重
くみて、会の初仕事ということで、会員の城
数馬を説得役に、白馬山麓まで遣わしたのだ
つた。これも、河野の文章があつたから白馬
岳が別格に扱われたものと思われる。

河野齡蔵の教えを受けた中野三男によると
、「又先生は自然が破壊され、自然の美が害は
れて行くのを悲しまれた。梓川の上流地方に
沢山の土工が入り込み、岩を割り、谷川を塞
め橋を壊し、山容が改まる程の大工事を
行つている頃、その辺を通られる時、如何に
文化の向上発展の為といえ、斯くして自然が
次第次第に破壊され、人工的な文化の山の中
に驛々乎として入つて行くのを見て悲しまれ
たものである。」(「河野先生のことども」)
今日では、かなりの精通者でも、北アと八
ヶ岳などの一部にコマクサの繁殖地を知るの
みである。

(登山史研究)

山と博物館 第24巻 第9号
発行所 長野県大町市TEL②〇二二一
印刷所 大町市 俵町 山岳博物館
定価 八〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野二二二九三二)